



知の圧政

正しさは、静かに人を従わせる。

知は、本来、開くためのものだった。

だが、正解として固定されたとき、
それは場の温度を決める。

知ることを否定しているわけではない。
学ぶことを軽んじているわけでもない。

知は必要であり、理解は人を救う。

ただ、
それが上に置かれたとき、
位置が変わる。

知の圧政は、強く現れない。

「普通はこうだよ」

「データではこうなっている」

「常識的に考えて」

その言葉は、静かに場を整える。

整った場では、

違和感は遅れとして処理され、

迷いは未熟として回収される。

残るのは、

選ばれた言葉だけ。

そこでは、

考えることより、

外さないことが優先される。

それは、押しつけではない。

間違えたくない、という感覚。
責められたくない、という予感。

その重なりが、
正しさの側に人を寄せる。

寄り集まった正しさは、
やがて位置を持つ。

知は、使われるものから、
立つ場所へと変わる。



正しい側にいるほど、
声は小さくなる。



Edition — 価値観の航路
別景：知の圧政

著者：美学思想家 古川玲奈
発行：Raffiné
2026